|  |  |
| --- | --- |
| 専攻分野の名称 | 看護学 |
| 専攻の区分 | 看護学 |

テーマ名：　精神科薬物療法を受ける患者の有害事象を防止する看護師の役割

氏名：　　牛根　嘉孝

－目　次－

1. はじめに……………………………………………………………………………………p.１

2．精神科薬物療法……………………………………………………………p.〇

2－1．神経の働き……………………………………………………………p.〇

2－2．向精神薬の薬理作用……………………………………………………………p.〇

2－3．向精神薬の有害事象……………………………………………………………p.〇

3．看護師の責務……………………………………………………………p.〇

3－1．協働のなかの看護師の役割………………………………………………………p.〇

3－2．看護師の具体的服薬管理………………………………………………………p.〇

3－3．看護師の現状と困難………………………………………………………p.〇

4．看護薬理学教育……………………………………………………………p.〇

4－1．看護薬理学教育の必要性と課題…………………………………………………p.〇

4－2．受容体プロフィールの視覚化による看護薬理学教育への貢献……………p.〇

5．おわりに

6．参考文献

1．はじめに

1. 精神科薬物療法　省略検討

医師が処方する向精神薬は主にモノアミン系、アミノ酸系など脳の神経伝達ホルモンの動態に作用するとともに、脳だけでなく全身に作用し、有害事象との関連も存在する。看護師としては、精神科薬物療法とは切っても切り離せない神経系の構造や機能について理解しておく必要がある。

2－1．神経の働き

神経とは、全身の諸器官に分布する神経とを結び、情報伝達を担う組織である。全体の構造からみると、情報の統合のため体正中部に集合して存在する中枢神経系と、中枢外に存在し、個別に線維として認識される末梢神経系とに分けられる。中枢神経系の機能区分は脳と脊髄に分けられ、脳はさらに脳幹、間脳、小脳、大脳に区分される。それらはニューロン間の神経伝達物質を介して、全身から集まってくる情報を処理し、全身に指令を送る等、神経系統の中心的な働きをしている。末梢神経系の機能は脳から延びる脳神経、脊髄から延びる脊髄神経から区分され、さらに体性神経、自律神経が区別される。体性神経は筋の運動や皮膚の感覚を支配し、自律神経は交感神経系と副交感神経系を2重支配し、逆方向の効果を及ぼすことで拮抗しており、内臓や血管を支配する（図1）。

図1 神経系の機能的区分



（出典：岡田隆夫・坂井建雄（2018）:人体の構造と機能―人体の構造と機能及び疾病Ａ―.一般財団法人 放送大学教育振興会.pp181-186を参考に筆者が作成）

神経伝達を行うためのニューロン間の神経伝達物質は、種類としては100種類以上がわかっている。その内、中枢神経系の神経伝達をターゲットとし、薬物療法に応用され重要であるものは、ドパミン、ノルアドレナリン、アドレナリン、セロトニン、アセチルコリン、ヒスタミンを総称したモノアミン系神経伝達物質である。（図2）。

図２→を参考に筆者が加筆

図３→出典

一方、交感神経系と副交感神経の節前ニューリン、節後ニューロンから、2種類の伝達物質（ノルアドレナリンないしアセチルコリン）が放出されることで、バランスを保ったり、調整している（図3）。図3から、モノアミン系神経伝達物質が中枢神経系のみならず、末梢神経系にも深く関係していることがわかる。

2－2．向精神薬の薬理作用

MALTAとか

2－3．向精神薬の有害事象

精神科薬物療法で使われる向精神薬の多くは、脳への作用をターゲットとしている。しかし、２－１の神経の働きを考えると、脳や脊髄である中枢神経系の神経伝達に作用するとともに、脳神経や脊髄神経である末梢神経系にも作用することが理解できる。

1. 看護師の責務

3－1．協働のなかの看護師の役割

3－2．看護師の具体的服薬管理

3－3．看護師の現状と困難

1. 看護薬理学教育

4－1．看護薬理学教育の必要性と課題

4－2．受容体プロフィールの視覚化による看護薬理学教育への貢献

4－3．精神科看護の展望

1. おわりに
2. 参考文献